

Cover Story

【民話と自然科学2】

民話に見る『カキの実の効能』

民話や神話は単なるお伽話に止まらないことが多い。その中には村落社会における慣習や決まり事などの由来、農事暦における時機などが豊かに盛り込まれている。そして、創話当時の人々を取り巻く自然現象の由来を説明しようとするものも少なくない。そのような事例を不定期に紹介しようと思う。



民話「柿の化け物」

宮城県、香川県、山口県に、柿の実に纏わる似たような民話が伝承されている。

すなわち、…

留守番をしている小僧、女性のところに見知らぬ男が訪ねてきて、出させた器に糞をして「食べる」と強制する（貴君が食事前だったら申し訳ない…）。嫌々ながら食べてみると甘くてすこぶる旨い。帰っていくこの男の後をつけていくと、熟れた実がたくさんついている柿の木のところまで姿を見失う。たくさんの美味しい実をつけているのに食べてもらえないため、樹が化けたのだろう、

…という話である。

柿の木（標準和名：カキノキ）は、日本で古来より植栽されている有用植物である。堅い幹は家具材に、葉は血圧降下作用があるお茶として飲用される。また、未熟の実を発酵させた液は防水・防腐剤である「柿渋」として利用されるなど、余るものがない。言うまでもなく熟した果実は、昔から食されており、ビタミンC・カリウムなどの機能性成分を豊富に含み、「柿が赤くなると医者が青くなる」と言われるほどである。

この民話は、それほどものを無駄にするな、という教訓を含んでいるのであろう。2018年度は本校敷地内の柿の実が、年を越えても大量に樹についたままだった。そのうち化けて出そうである。

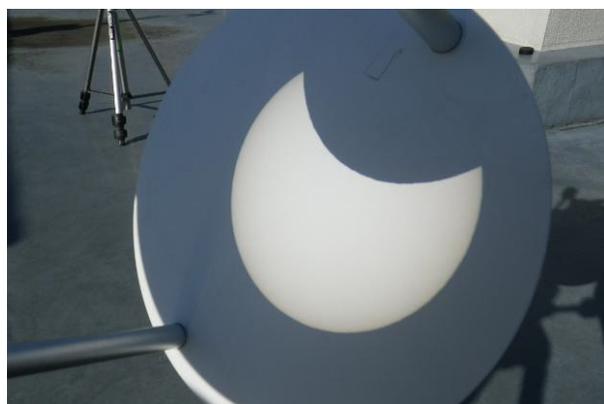
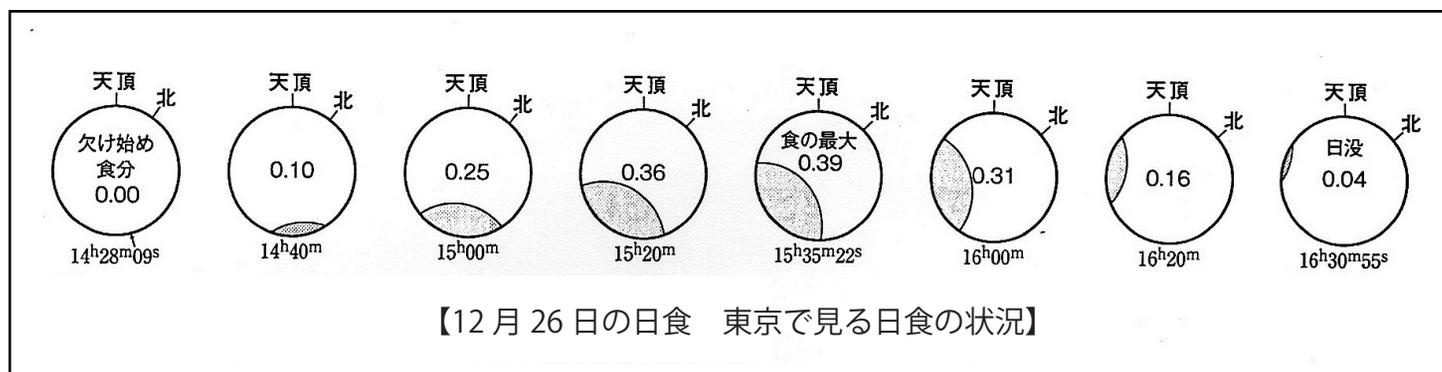
(Miyahashi)

年が明けて早々1月6日に部分日食がありました。午前8時半頃から欠け始め、最も大きく欠けたのが10時過ぎ、天文年鑑2019によると42.2%ほど欠けたようです。日食の終わりは11時半過ぎ、およそ3時間の天体ショーでした。この日の関東地方は薄い雲に覆われながらもおおむね晴れていましたから、サングラスを通して見た人もいるのではないのでしょうか。私は卓球の大会で上尾にいましたが、サングラスを忘れてしまい見るできませんでした。

日食はご存知の通り月が太陽を隠す現象です。月は地球のまわりを周っていて、およそひと月ごとに太陽と地球の間に入ります。ただ、月が地球のまわりを周る公転軌道面は、地球と太陽の公転軌道面（黄道面といいます）に対して、5度と少し傾いています。したがって日食は毎月起きるわけではなく、2つの平面の交線付近で、月が太陽と地球の間に来たときにだけ日食は起こることになります。そして日食が観測できる場所は、当然月が太陽を隠すその時刻に昼間（＝太陽が出ている）で晴れていなければなりません。そのようなわけで、毎月には起こらない現象である上に見られる場所は限られる、なかなか珍しい現象なのです。

さて、次に日本で日食が見られるのは今年の年末12月26日です。これも部分日食で食の最大は38.8%ほど、今回と同じくらいです。異なるのは時間帯で、食の始めが14時半頃、食の最大が15時半過ぎ、食の終わりが16時半頃でほぼ日没になります。もちろん、場所が変わると日食の時間帯や欠ける大きさも変わります。天文年鑑2019によれば南に行くほど食の大きさは大きくなるようです。例えば那覇では47.4%、小笠原の父島では60.4%です。海外ではシンガポールが97.3%で金環日食になります。金環日食は月が太陽の前に完全に入り、太陽の外側だけがリング状に見える食です。これは月が地球から遠く、太陽を隠しきれないときにだけ起きる大変珍しい現象で、日本では2012年にありました。（次回は日本では2030年。）

というわけで、まだ先の話ですが12月26日はぜひ日食を見ましょう。夕焼けになった赤い太陽だったら、欠けた太陽を肉眼で見られるかもしれません。私のようにサングラスを忘れても大丈夫です。そして冬休み中ですし、金環日食を見にシンガポールへ行く…なんてことができたらもったいないですね！



【太陽投影板にうつる部分日食】
2019年1月6日 10:06 食の最大
本校天文部による撮影

紅葉も終わり、すっかり葉を落とした森は寂しい、そんなイメージがありますが、私はけっこう冬の森が好きです。

高木が葉を落とすおかげで、林床まで陽が差し込み明るい森になりますし、蚊の猛攻を受けうっそうと茂った暗い夏の森よりもずっと歩きやすく、いろいろな発見も多いのです。特に野火止用水跡沿いなども歩きやすくおすすめです。先日はハトの羽根が多数散らされたタカの摂餌跡なども見られましたし、タヌキにも遭遇しました。生物選択者は授業でも学びましたが、埼玉のこのあたりは本来の想定バイオームでは照葉樹林になる地域です。そうすると冬でも暗い常緑樹の森となりますが、かつて人の手が加わったためにクヌギ、コナラなどの落葉樹がまだまだ多いいわゆる雑木林となっているのです。本来の照葉樹林が見られるのは、古い神社くらいなものでしょう。

文化人類学の一説に照葉樹林文化というのがあります。西日本から台湾、中国の華南からヒマラヤにいたるまで照葉樹林帯は続いており、これ伝いに共通した文化が広まったという説です。これに対して東日本から東北アジアへかけてのナラ林文化があります。つまり日本の文化は、生活、食、方言にいたるまで東と西の二極性があるのは、それら各森に由来するというものです。照葉樹林文化では、縄文時代以前にまず焼畑農業が伝わり、その後同じルートで稲作が伝わったということです。この照葉樹林文化論は賛否両論あり、あくまでも一説ではありますが、私はこの説が大好きです。すっかり森とは疎遠になってしまった私たちですが、元来、森の樹上で暮らす動物が起源であったといわれる人類、その後も森とともにその生活、そして文化を創ってきたに違いないと思うからです。

稲作以前に行われた焼畑農業、西日本では江戸時代くらいまではまだけっこう行われていた地域があったようです。驚くことにこれがまだ日本で行われているところがあって、宮崎県の椎葉村という村で、日本の三大秘境とも言われている村なのです。この村のたった一戸の農家、椎葉家が縄文時代より続く国内最後の焼畑農業を営み、先ごろ「世界農業遺産」(FAOによる)にも選定されました。地球環境を守る究極の有機農法だそうです。この村は、今私が最も行って見たい場所の1つです。

皆さんも古よりの我々日本人の創ってきた文化に想いを馳せながら、校内の森を眺めてみてはいかがでしょうか。

(Izawa)

年中行事の世界 No.04 講書始 —宮廷行事編04—

Annual Events

今年は7日に授業が再開されました。生徒諸君は気持ちも新たに勉学に励んでいることでしょう(!) 宮中ではこのタイミングで「講書始」が行われます。

講書始は、1月に天皇皇后両陛下が、皇族方や翌年の進講予定者を含む陪聴者とともに、宮殿松の間(明治宮殿では鳳凰ノ間)で各学問分野の第一人者から講義を受けられる行事です(昨年紹介した四方拝とともに新年の季語一角川『俳句歳時記 第五版』)。直接の起源は新しく、1869年に京都御所で行われた御講釈始に由来し、皇室儀制令(1926年)で明文化されて恒例行事となったもので、占領期の同令廃止後もその大枠が受け継がれています。戦前は文武両道が意識されたようで、この行事や歌会始に加えて、8日には代々木練兵場ほかで「陸軍始(観兵式)」も行われていました(-1945。海軍始は明治初期に10年弱実施)。

講義の編目は1952年までは国書・漢書・洋書の三分野から選ばれ、国書は3年生にはおなじみの『日本書紀』・『続日本紀』や『万葉集』が、漢書は『論語』などが多く講じられていましたが(洋書は同一書の進講なし)、翌53年からは人文・社会・自然科学の各分野から選ばれることとなり(『昭和天皇実録』。1979年からは人文科学1名と社会・自然科学2名)、今日に至っています。進講者の顔ぶれも、教育勅語を起草した元田永孚(1872-85(etc.))や法学の穂積陳重(1914etc.)・美濃部達吉(1932「天皇機関説」で著名)・我妻栄(1957)、歴史学の黒板勝美(1931)、日本文学の佐佐木信綱や物理学の長岡半太郎(1938)・江崎玲於奈(1999)、哲学の西田幾多郎(1941)・和辻哲郎(1943)、フランス文学の桑原武夫(1977)、化学の福井謙一(1985)・野依良治(2005)、社会人類学の中根千枝(1993)、医学の本庶佑(2019)など錚々たるものです(知らない人物がいたら辞書等で調べてみましょう)。

慶應義塾からの進講者は、管見の限りでは小泉信三元塾長(経)が最初のように(1952「福沢諭吉の『文明論の概略』について」)、以来、奥井復太郎(経;1961)・高村象平(経;1971)・石川忠雄(法;1998)各元塾長などを経て、田代和生(文;2018)に至る計8名が選ばれています。手前味噌ながら、田代先生は私の恩師の一人で、このときばかりは極度の緊張を覚え、最初どこから出たのかと思うような声が出たと明かしていただきました。ちなみに、このなかで本校に特に縁があるのは高村元塾長。正門の門標の揮毫者です。塾長退任後、1978年10月の本校30周年記念式典を前に揮毫されたようですが、その後製作に時間がかかり、式典に間に合うかヒヤヒヤしたと当時の事務長が語っています(『志木高五十年』p.464)。本校らしい(?)エピソードです。

なお、最近の進講者の進講内容は宮内庁ホームページで閲覧可能です。1・2年生の諸君は学部選択の、3年生の諸君は進学学部での専門分野決定の参考にしてもいいですね。

(Ikeda)

詳細は樋口先生に委ねるとして、9-12月までの例年でない気温変化は校内の植物に少なからぬ影響を与えている。イチョウなどの落葉は年末までずれ込んだ。カキの実食堂は、12月初旬には食材払底で閉店するのに、1月15日現在でもまだ多くの実を残している。ビワの花も例年以上に花期が長いように思う。

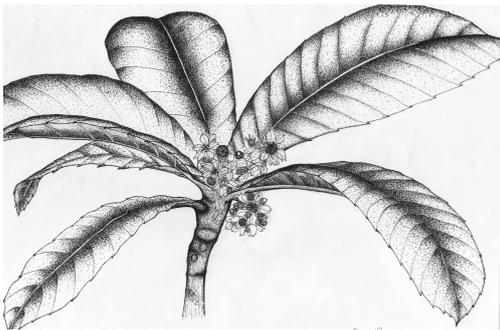
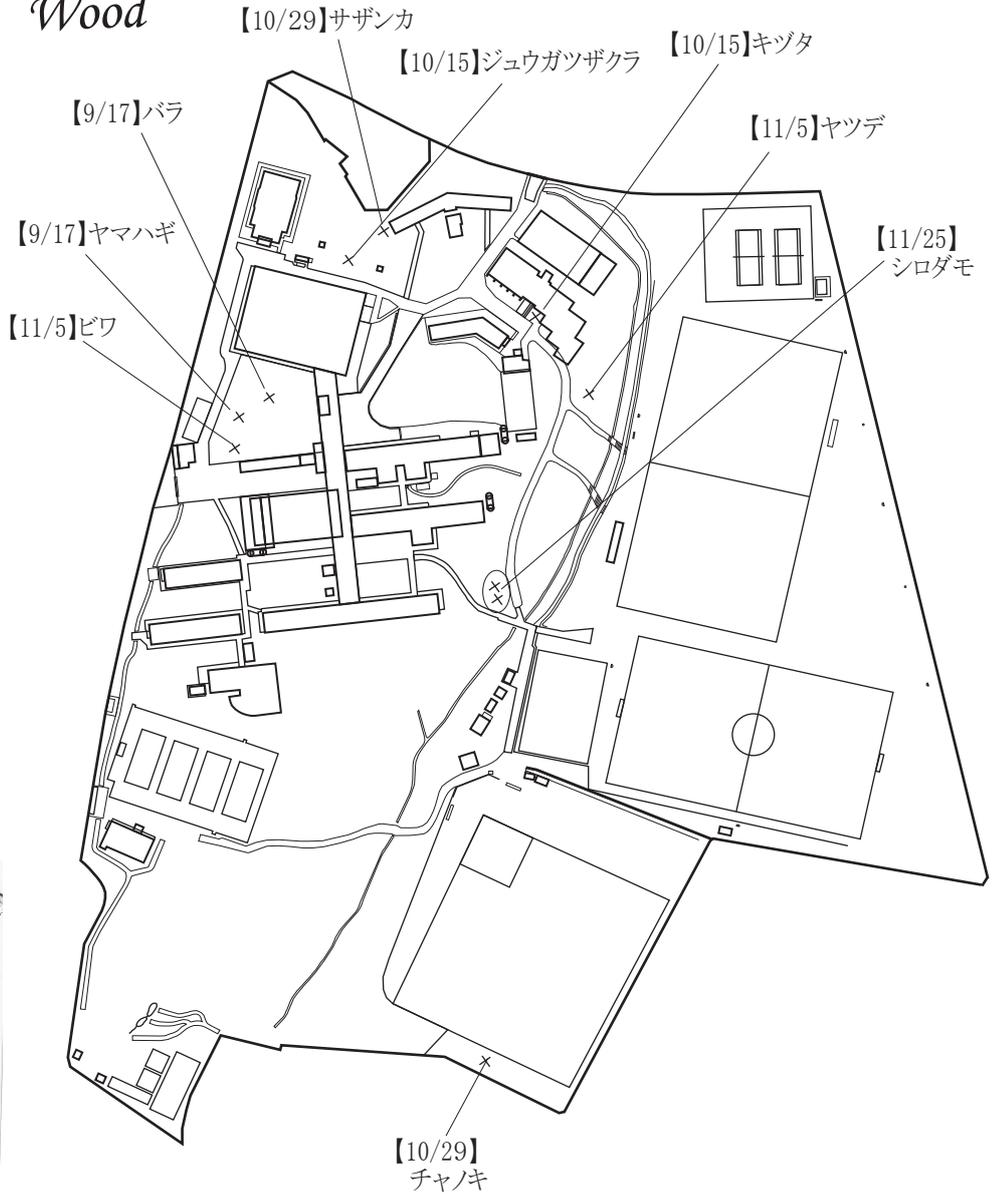
果実で有名なビワは、中国では「大薬王樹」の別名をもつ薬草で、その名の通り広い薬効を示す。ビワの葉は、黄色ブドウ球菌などに対する抗菌作用、健胃、消炎、下痢止め、利尿、鎮咳など漢方薬としてさまざまな効果をもたらす。煎じて飲用とする場合が多い。

[2018年9月～2019年1月までの開花情報]

Grass

- 17. Sep. 2018 オオケタデ, オオブタクサ,
チヂミザサ, ミヨウガ, ヒガンバナ,
キンエノコロ, カゼクサ
- 5. Oct. 2018 アメリカセンダングサ, サクラタデ,
ヤブマメ
- 15. Oct. 2018 ホトギス, チカラシバ,
カントウヨメナ, セイタカアワダチソウ
- 29. Oct. 2018 カナムグラ
- 15. Nov. 2018 ヌスビトハギ, ツワブキ
- 25. Nov. 2018 ハハコグサ, チチコグサ, ナズナ,
ホトケノザ
- 7. Dec. 2018 ミドリハコベ, ニホンズイセン,
オオイヌフグリ
- 6. Jan. 2019 ヒメオドリコソウ

Wood



【ビワ】 バラ科ビワ属

(Miyahashi)

この限られた紙面では、名前の出ている植物や動物がどのようなものであるかをお示しする事は不可能です。名前を手がかりにぜひ図書館などで一度調べてみてください。

執筆・担当区分	動物・環境	井澤 智浩 (Izawa)
	天文・気象	樋口 聡 (Higuchi)
	風習・行事	池田 卓也 (Ikeda)
	植物・地質 他[&発行責任]	宮橋 裕司 (Miyahashi)
	編集・植物画	荒巻 知子 (Aramaki)